

48 先覚的医界ジャーナリスト

山谷徳治郎

中山¹⁾ 沃・小田²⁾ 皓二

山谷徳治郎(一八六六一—一九四〇)は現、岡山県真庭郡勝山町(石井信道の出生地)に生まれ、明治十八年(二八八五)岡山県医学校を卒業後、東大医学部選科で病理学を学んだのち、明治二十四年(一八九一)「医事衛生制度全書」を著述、出版した。この書は七八〇ページで、三宅秀東大病理学教授の指導のもとに、散乱していた本邦における明治初年来の医事衛生に関する法令を編集したもので、巻頭に長与専斎の題字を掲げ、すでに医界ジャーナリストの片鱗を示している。明治二五年(二八九二)月刊「国家医学」(のち改め「医海時報」)を創刊。大日本医学会の創立をめぐり森鷗外らの「衛生療病誌」と論争。明治二八年雑誌の経営権を田中義一に譲渡。次いで滋賀県検疫官を経て明治三十年岡山県津山で

私立津山病院を開設したが、のち閉鎖、明治三六年恩師清野 勇が大阪市で開設した清野病院の副院長に就任。

明治四十年(一九〇七)ドイツに私費留学、ギーセン大学で病理学、細菌学を研究、ついでゲッチンゲン大学に転学、「妊娠時の卵巣切除の問題に対する症例報告による寄与」と題する論文で明治四二年(一九〇九)八月ドクトル・ディチーネの学位を取得、二年間のゲッチンゲンでの勉学を終え、同年十一月帰国するまでベルリンに滞在。その間、同年八月二九日よりハンガリのブタペストで開かれる第十六回万国医学会に出席のため来独した北里柴三郎、緒方正清に同行し同医学会に出席。同年九月下旬北里、岡山の同窓秦佐八郎とに同行しロンドンへ見学旅行。同年十月十七日ベルリンを出発、北里、緒方正清らとともにシベリア鉄道を経由、敦賀に帰着。

山谷は在独中、「医海時報」(経営は三共株式会社)の委託により随時ドイツ通信を送り、同誌に掲載された。帰国後ただちに塩原又作三井杜長の懇請により同社の総務理事に就任、「医海時報」を主宰した。明治四四年(一九一一)三共を辞し、日新医学社を創立、月刊「日

新医学」を創刊、長年培った人脈をもとに、医界の主要な医学者の論文や純学術論文をつぎつぎと掲載し、医学雑誌出版界の首位を占めた。つづいて明治四五年（一九

一二）区政評論週刊誌「医事公論」、大正二年（一九一三）臨床月刊雑誌「臨床医学」をそれぞれ創刊、さらに昭和三年（一九二八）「医薬新報」を創刊し、幅広い人脈により終生医界におけるジャーナリストの活発な活動を続けた。その活動の詳細は、「楽堂古稀記念集」（一九三五年刊）や「故山谷徳治郎追悼奠誌」（一九四〇年刊）で知ることができる。

演者は二〇〇二年四月、自身の留学大学でもあったゲツチンゲン大学を再訪し、同大学の公文書館で山谷氏の学位記、学位論文、審査教授らの評価成績、その他の文書類が十数点残されていることを確認することができた。

昭和三年（一九二八）流行性脳炎に罹患、昭和五年同病再発。昭和十三年（一九三八）自己の体験に基づき、流行性脳炎が及ぼせる眼変化の臨床的及び病理的新知見に関する学位論文を慶応義塾大学医学部に提出、医学博

士の学位を授与、時に七二歳であった。昭和十五年（一九四〇）五月二六日肝硬変、尿毒症、腸出血により死去、享年七五歳。

ゲツチンゲン大学に保存されている山谷の資料を追加し、報告する。

（川崎医療福祉大学¹⁾ 医療法人おだうじ会 小田病院²⁾